OUMC

大阪大学山岳会 会報
No.12
2010年6月

発　行　大阪大学山岳会
〒562－0031　箕面市小野原東4－19－45
大野義照方

現役山岳部が休部に
大野会長らが存続策模索

我々会員の古巣であり、心の故郷である大阪大学山岳部が休部状態に陥っている。部員確保が思うに任せず、今年度はついに大学院生2人だけになってしまったからだ。一時は、大学体育会に解散届を提出しようとの動きもあったが、大野義照会長が保留を要請。中之島アウトドア部（医学部山岳部が改称）の有志に継承してもらうなどの存続策を模索しているが、予断を許さない情勢だ。

現役山岳部の部員数はここ数年、低迷が続き、昨年度は学部4年生1人、大学院1年生2人の計3人となった。このため、部活動が難しい状況に追い込まれたが、今年度はこの学部生が卒業してしまったうえ、院生2人も最終学年を迎えて多忙となり、新入部員受け入れさえ困難になった。また、大学体育会には休部という規定がなく、来年になれば部室や倉庫の後始末をするメンバーさえいなくなることも解散を検討する一因になったとみられる。

大野会長がアウトドア部に期待するのは、医学部には古くから山岳部に入部する学生が多かったうえ、近年は旧医学部山岳部からの入部も相次いだことなどが背景にある。しかも、アウトドア部は同好会組織であることから、山岳部を継承する有志が両方の組織に所属することも可能で、継承のいちばんの条件は医学部以外の学生を全学から受け入れることとしている。

大野会長らはこうした考えをもとに医学部出身の山岳会員を通して医学部山岳部OBに協力を要請しているところだ。また、山岳会としては現役部員や若手会員に新入部員勧誘活動強化を呼びかけ、必要な資金援助など支援体制を確立することにしている。

現役休部に初めて言及
OUMC新年会

本会の2010年新年会は1月28日夕、大阪市北区の阪大中之島センター（旧歯学部跡）で開かれ、17人が出席した。

予定されたテーマは特になく、懇親が主体だったが、大野会長が現役山岳部の部員確保難に関して「休部を検討しているようだ」と、森藤正人山岳部長の報告を紹介したのが注目された。

出席者は次のみなさん。（会長以外は卒業年次順）

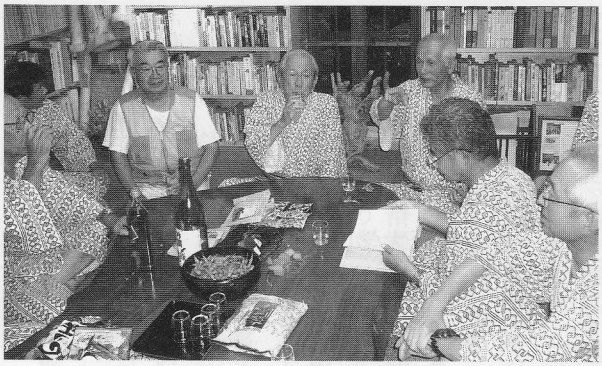
大野義照▽田島汎▽山本光二▽木村裕一▽高木俊夫▽三枝礼子▽宍戸元▽岡田博司▽五百蔵弘典▽打出英樹▽大川和秋▽高田邦雄▽石浜高明▽甲田吉彦▽山田靖則▽大宅幸夫▽明神知

唐松、雨飾へ登山組も
夏の白馬集会

2009年度の白馬集会は8月29日から長野県白馬村八方の「ホテル対岳館」（丸山徹也館主）で開かれ、家族を含め18人が参加した。

初日は1階レストランで開会式と夕食のあと、別棟の「與兵衛倶楽部」へ。大野義照会長は所用で欠席したが、会創立60周年記念事業のその後などについて懇談した。

2日目は自由行動。保母、前澤、横尾3氏は雨飾山へ日帰り登山をしたほか、山本信、野田、田井3氏は八方尾根から唐松岳―五竜岳縦走をめざしたが、悪天候のため唐松岳で打ち切り、唐松山荘泊後、八方尾根を下山した。3日目の懇親ゴルフ大会は安曇野市の穂高カントリークラブで開かれた。



山の本に囲まれて歓談

出席者は次のみなさん。（卒業年次順）

田島汎▽山本光二▽宍戸元▽三枝礼子▽岡田博司▽坪井和子▽兼清喜雄▽山本信樹▽野田憲一郎▽広瀬貞雄▽田井英男▽保母武彦▽前澤祐一▽横尾秀次郎▽高田邦雄▽山田靖則

雪の前穂高で散骨
越智氏追悼山行

本会理事も務めた越智栄次郎氏（1983年経済学部卒）が岩登り中に亡くなって丸2年が過ぎた。そんな中、昨年5月には山岳部時代に山行を共にした同期生らが追悼山行を実施。呼びかけ人の奥山宏臣氏（84年医学部卒）が報告を寄せてくれた。

◇

＜柏木での事故＞

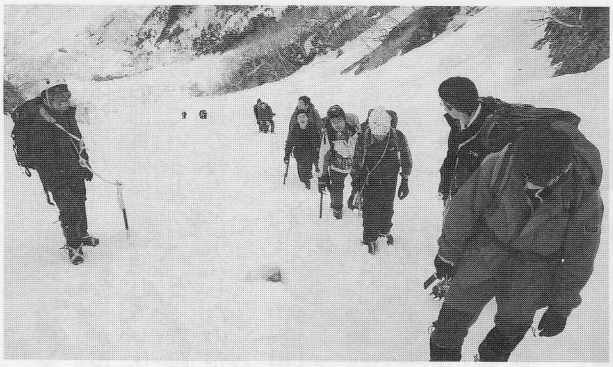
2008年3月2日、奈良県・柏木の岩場での事故で越智栄次郎君が亡くなった。享年48歳。メーリングリストで回ってきた突然の訃報を目にしたときには、ただ信じられない思いであった。その後の葬送セレモニーなどで現実を目の当たりにするにつれて、大切な仲間を失った喪失感と悲しみがこみ上げてきた。もう一緒に山に登る事はできないけれど、仲間が集まって、これまで登った山の話などができれば彼も喜んでくれるのではないかと考えた。

＜散骨の依頼＞

越智君が亡くなって3カ月余りが経った一昨年6月、古い山の写真を届けようと、ご自宅に伺ったところ、奥様から「山に散骨してほしい」とのご依頼があった。奥様は越智君と生前からそういう話をされていたわけではなかったが、お骨あげのときに山に帰してあげたい、と思われたそうだ。だから分骨されてお骨の一部を自宅に保管されていた。散骨場所は奥様のご希望で「雪の穂高」ということになった。具体的な場所や日程は、限られた日数で確実に入山できる5月の前穂高岳ということに私の一存で決めさせていただいた。

そして参加者が多い方が越智君も喜んでくれるだろうと思い、5月の連休にあわせて計画を立てた。幸い、越智君の同期である野口明君が彼らの年代を中心としたメーリングリストを作ってくれていたので、参加者を募ったりするのはほとんどメールで済ますことができた。結果的には10名という多くの方に参加していただいたことで、改めて彼がこれまで山に注いできた情熱と仲間への思いの深さに気づかされた。

連休が近づくと長いブランクに不安がつのるばかりであったが、最後は、まあ何とかなるさと開き直って入山の日を迎えた。前日は少し早く



奥明神沢を登る

出発して平湯温泉にでもという計画であったが、仕事の都合で結局は夜遅く車で出発して途中のサービスエリアで仮眠する、現役時代と変わらぬタイトな入山となった。

＜山行の記録＞

【参加メンバー】科野昌蔵、草尾寛、奥山宏臣、野口明、榊原淳、畑秀信、宮田俊一、東條公資、大倉徹雄、戸叶聡

【期間】2009年5月3日―4日

【行動概要】

3日（晴れ時々曇り）各自で入山。科野、奥山は上高地から入り、昼に岳沢到着。天気良く、風もないため暖かい。積雪は少なく、テント場近くには水が流れていた。野口、榊原、宮田、大倉は前日から入山し、こぶ尾根登攀後、昼過ぎに岳沢帰幕。次いで戸叶、東條が上高地から到着。畑は明神東稜から前穂高岳経由で合流。最後に草尾が上高地から入山して、夕方には10名全員が岳沢に集合した。

4日（高曇り、視界良、ほぼ無風）3・00過ぎ起床、4・50岳沢天場発―6・30奥明神沢二俣分岐―8・30前穂高山頂着―9・00皆で散骨・合掌後、同ルートで下山開始―11・00前後（個人差大）岳沢天場着―12・00撤収後、下山開始―13・30上高地河童橋着

予定通り、全員で奥明神沢から前穂を目指す。狭い谷に入るころから傾斜も徐々に急になるが、雪が安定しているのでロープの必要はない。途中の二俣を左にとり、前穂に直接突き上げるルートを選択。沢の傾斜は最後までほぼ一定で、トレースに従い1歩ずつ高度を稼ぐ。やがて谷が開け、雪の斜面を登り終えると、ようやく前穂頂上に着いた。青空は見えないが、視界は良く、槍から穂高につながる稜線が一望できた。

皆で散骨して合掌の後、同じルートより下降開始。畑は同行の東京YCCメンバーと合流すべく、そのまま北尾根を下っていった。帰りは軟らかくなった雪の斜面にキックステップを効かせながら慎重に下る。いったん岳沢で集合してテント撤収後、各自上高地に下山した。河童橋では越智君のご家族に合流し、散骨場所などについて報告した。その時はちょうど雲が切れて、上高地から前穂頂上を望むことができた。

みんなで散骨

◇

＜ご家族からの礼状＞

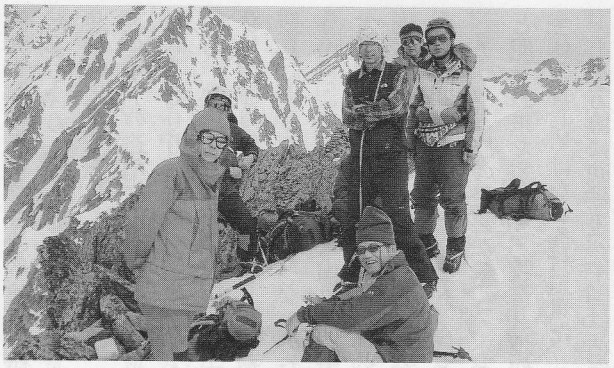
前略　御免下さいませ

この度は無理なお願いを聞いて頂き、ありがとうございました。その後、お疲れが出ておられませんでしょうか。奥山さんには何回も家に来て頂き、率先して計画を進めてアドバイスして下さり本当に感謝しております。日頃なかなかお会いできないお友達と一堂に会して主人も喜んでいると思います。現地で皆様とお別れした直後、息子と娘は同時に「みんなパパそっくりやね。パパが10人いるのかと思った」。山好きは似るのでしょうか？

写真で山の様子拝見しました。美しい景色ですね。あそこなら主人も喜びますよね。山に関しては妻の私はあまり良き理解者ではなかったのですが、最後に大好きなあの美しい山へ大好きなお友達の手で眠らせてあげられたので、少しはいい事をしたのかな、と思っております。正直ほっとしています。次のステップへこれで私たち家族も進めそうです。とは言え、主人の抜けた穴を私が埋めるのはなかなか大変で、いろいろと問題は山積みなのですが……。また皆様の御力をお借りする時があるかもしれません。どうぞ今後ともよろしくお願い致します。

せっかくのゴールデンウイーク、ご家族と共に過ごされる大切な時間をいただいてしまい、奥様、お子様に感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。御家族の皆様の御健康をお祈り申し上げます。

平成21年5月　　越智　美和

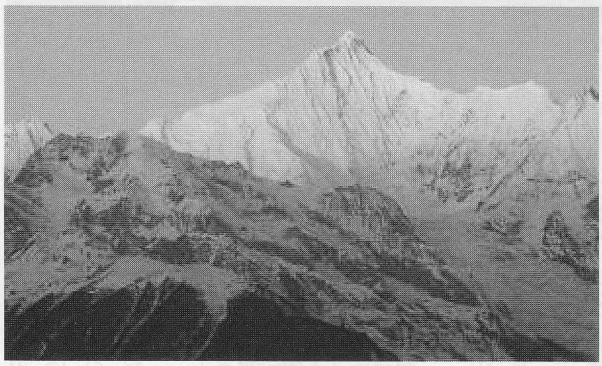


前穂頂上で

雲南、四川の旅1800キロ「横断山脈」を越えて

横尾 秀次郎

去年末、糸井文彦、石原敏雄両君と10日間かけて中国四川、雲南両省の麗江―香格里拉―徳欽―芒康―巴塘―康定―丹巴―日隆―成都約1、800キロをトヨタのランドクルーザーで巡ってきた。チベット、四川方面への本会員のツアーは近年、石原君が中心になって継続的に行われており、2008年暮れのチベット東部周遊（会報11号に出雲路敬孝君が報告）、2009年5月連休の成都―ラサ旅行、そして今回の雲南―成都へと続いている。今年5月には石原君は四川の秘境、稲城への旅を果たしている。ごく近い将来、この地域での本格的な山行が本会の名で行われることを念願している。



梅里雪山主峰

中国の地勢図には、ヒマラヤの東、チベット高原の東端に位置するチベット、雲南、四川を南北に走る多くの山脈を総称して「横断山脈」と記載されている。この地域にはいまだに多くの未踏峰があるが、その詳細などについては別稿の出雲路君の文章に譲ることにし、ここでは今回の旅の簡単な報告にとどめる。

今回走った道のうち康定までは、雲南と成都から人民軍がチベットのラサに進攻可能な軍用道路を兼ねており、舗装が急速に行われている。90％以上は舗装されており、悪路を予想していた我々を喜ばせた。それに行程中はすべて快晴で、28歳の太っちょの阿ガイドと、人好きのする色男で、写真家でもある48歳の伊運転手を含めた5人の雰囲気がよく、楽しい旅であった。

ルートの途中には5、500メートルから6、000メートル級の未踏峰が並んでいる。白馬雪山、梅里雪山、海子山など。この程度ではまだ、海外から登りに来る候補にはならないのだろうか。このうち梅里雪山は、京大の大遭難の後、ラマ教の聖山として今後は入山出来ないといわれる。沿道の谷筋には雲南、四川とも、ほとんどチベット族の集落が続く。木と石と泥で出来た家々で、牧畜と畑作が主体の貧しくはない農村風景だ。

上海万博に向けて、中国は活気に満ちていた。舗装は「5月に通った時よりもはるかに進んでいる」というのが石原君の感想で、まだセンターラインを引いていない出来たての道路を走ることもあった。ガイドの阿さんは料理も得意で、食堂でもメニューを我々に合うように決めてくれた。良い食堂をみつけるのも上手で、食事が楽しい旅でもあった。幸い、皆、高山病にもならず、適度に酒も飲むこともできた。

厳冬期に4、000メートルを超える雪の峠を何度も越えての自動車旅行はさすがに緊張するもので、満月の夜道もあった。一度、雪道のカーブで車の尻が振られ、対向車の横腹にテールランプ部分をぶつける事故があった。相手はパトカーで、一時はこれで旅も終わりかと思ったが、阿、伊両氏の抜群の交渉力で2万円程度の罰金で済み、車も旅をまっとうできた。

今回も石原君が上海の旅行社で設定させた旅で、ずいぶん安い費用で済んだようだ。（日本―上海の運賃以外で約36万円）

以下、行程のメモを記しておく。

12／24 羽田―上海―昆明―麗江（泊）。夜の古城見物。

12／25 午前、玉龍雪山麓の公園で観光。午後、麗江（2、400メートル）出発。金沙江（揚子江）に下る。虎

梅里雪山山群の夕暮れ。徳欽付近

跳峡という大渓谷は工事中で行けず。登りきった高原から東北に、四川省の仙熱日（6、032㍍）と思われる峰が見える。香格里拉（シャングリラ、3、280㍍）は急速に発展中の都市で、元の中甸から改名し、観光に力を入れている。お茶の道の通商の要所であった。

12／26 早朝、500年ほど前からのチベット族の商家の家並みが続く古城地区の写真撮影。再び金沙江に下り、さらに長い登り道を進む。左に白馬雪山の山並み。峠を過ぎると梅里雪山が上部を雲に隠した姿で迫ってくる。徳欽を過ぎ、飛来寺酒店（3、435㍍）泊。

12／27 夜明け、目の前に広がる梅里雪山を撮影。瀾滄江（メコン）まで下り、塩井を過ぎてメコンを離れ、雪の峠に出る。峠を下り、金沙江の支流に出合い、この谷を上る。両側にチベット族特有の人家が続く。

芒康（マルカム）がラサへの道と成都への道の分岐点。右へ曲がり、峠を下り、再び金沙江に出る。巴塘（パタン、2、568㍍）泊。

12／28 どんどん高度を上げ、海子山の麓（4、700㍍）まで登る。厳しい寒さの中、未踏の山並みが聳える。雪原の続く毛野大草原は冬でも夥しいヤク、牛、羊が放牧され、チベット族の黒いテントが散在する。高原都市、理塘（リータン、4、010㍍）を過ぎ、原生林の続く雪道を急ぐ。15時前、対向車と接触し停車。16時30分出発、雅江で夕食。満月の中、雪の峠を上下し、さらに大雪山の山越え（4、295㍍）。夜半に康定（1、874㍍）着。この日の走行距離は467㌔。

12／29 大渡河に出、解放軍の聖地である濾定橋に立ち寄り、川をさかのぼる。丹巴（タンパ、1、874㍍）泊。近くの高所にチベット族の絵のように美しい集落があり、今は夏の避暑地になっている。

12／30 小金を経て、昼過ぎに日隆（3、229㍍）着。長坪溝を観光。四姑娘山（スークーニャン）が目の前に聳える観光スポット。日隆の民宿泊。

12／31 世界遺産になっている双橋溝を一巡。雪の岩峰、壮大な岩壁に囲まれた渓谷で、驚くほど美しい山岳公園。将来はロッククライミングの聖地になると思われる。その日のうちに成都まで行けそうと分かり、急遽、高度差4、000㍍、60㌔彼方の成都を目指す。途中は2年前の四川大地震の核心地帯で、悪路と復旧の熱気の中を通過し、7時過ぎに成都着。鍋料理と、お湯たっぷりのホテルに感激。

2010／1／1 成都の元日。金沙遺跡博物館では、揚子江での紀元前2000年—1000年に及ぶ古代文明の発見（2002年）という、歴史を塗り替える遺跡の上に立つ。古い町並みを残す老街、絹織物の博物館、四川大学を巡り、本場火鍋料理を楽しみ、川劇（京劇に対比できる四川の伝統演劇）に大笑いし、お土産にお茶を買い込んで元日は終わる。

1／2 成都—上海—成田のコースで帰国。

（1964年工学部卒）

◇

〈注〉文中の2009年5月連休の成都—ラサ行には石原、豊坂昭弘、大野義照の3氏が参加、約2、500㌔を走破した。

四川省、雲南省の高峰

出雲路　敬孝

今回のランドクルーザートレッキングの行動範囲（四川省西部並びに雲南省西北部）では、四川省の最高峰で、唯一の7、000㍍峰であるミニヤコンカ（貢嘎山、7、556㍍）と、京都大学隊の遭難で知られる梅里雪山（主峰カワカブ、6、740㍍）が著名である。また今回の出発地、麗江近郊の玉龍雪山（5、596㍍）、終着地成都の北西約200㌔にある四姑娘山（6、250㍍）

もよく知られている。

ミニヤコンカは1932年にアメリカ隊が初登頂。梅里雪山は遭難以後、入山が許可されず、未踏のまま残されている。玉龍雪山は87年にアメリカ隊が初登頂（84年に日本ヒマラヤ協会〈HAJ〉隊が入ったが不成功）、四姑娘山は81年に同志社大隊が初登頂した。いずれも秀峰、名峰と呼ばれるにふさわしい山容で、ミニヤコンカ以外の3山では周辺地域の観光化が徐々に進んでいる。

四川省の山は今回トレッキングの後半部、川蔵南路（芒康から巴塘、理塘、康定を経て成都）を軸として、大きくはチベット自治区との境界をなす金沙江（最後は揚子江となって海に注ぐ）に近い西部と、中部のミニヤコンカを中心とする①大雪山山系に分かれる。西部はさらに北部にある②雀儿山山系（川蔵北路、徳格東方）③沙魯里山山系岡嘎山塊並びに工卡拉山山系（同北路、甘孜周辺）、川蔵南路沿い北側④扎金甲博山塊（巴塘の北東方）とその周辺、同南側⑤央莫龍山塊（巴塘東方）⑥ゲニ峰を中心とする山塊、南部にある⑦貢嘎雪山（稲城南方、雲南省との省界近く。ミニヤコンカとは別の山）に分かれる。

山系、山塊ごとの主な未踏の山々は以下の通り。

①大雪山山系

ミニヤコンカ山塊のニャンボコンカ峰（6、144㍍）、無名峰（6、206㍍）、無名峰（6、134㍍）、康定南方ラモシェ山塊の白海子山（バイハイツシャン、5、924㍍）、康定北方の夏羌拉（シアチャンラ、5、470㍍）、無名峰（5、387㍍）

②雀儿山（チョーラシャン）山系

主峰：雀儿山I（6、168㍍、88年神戸大合同隊初登頂）、ポルジャブ（5、816㍍）

③沙魯里山（シャルリシャン）山系岡嘎（ガンガ）山塊並びに工卡拉山（ゴンカラシャン）山系

岡嘎（5、688㍍）、喀洼老熱（カワラニ、5、992㍍）

④扎金甲博（ジャージンジャボ）山塊とその周辺

扎金甲博（5、812㍍）、夏塞（シアシエ＝別名海子山、ハイツシャン、5、833㍍）

⑤央莫龍（ヤンモーロン）山塊

央莫龍（6、060㍍、この山塊の最高峰、91年に日大隊が入ったが不成功）、無名峰（5、870㍍）、相丘切克（シアチンチケ、5、863㍍）

⑥ゲニ峰を中心とする山塊

主峰：ゲニ（88年HAJ隊初登頂）、主峰から北～北東に繋がる無名の岩峰群（5、800～5、600㍍）

⑦貢嘎雪山（コンガシュエシャン、6、032㍍、この山群の最高峰、HAJ隊が試みている）、央邁勇（ヤンマイヨン、5、958㍍）、夏諾多季（シャルオドジェ、5、958㍍）5、000㍍級の未踏峰はここに挙げた以外にも数多く残されている。

× ×

〈注1〉多くの情報は横断山脈研究会の中村保氏の著書「ヒマラヤの東」「深い浸食の国」に拠っている。四川省の未踏峰について同氏が「岳人」今年4月号に美しい写真とともに紹介記事を書いておられる。〈注2〉横尾氏が報告で触れている雲南省徳欽の南方、白芒雪山（バイマンシュエシャン、別名白馬雪山、5、429㍍）と夏塞（別名海子山）、また扎金甲博については、「深い浸食の国」では未登頂であるが、岳人4月号の記事の地図では既登として扱われている。

（1967年工学部卒）

牛心山に新ルート開拓
中国四川省・四姑娘山群

畑 秀信

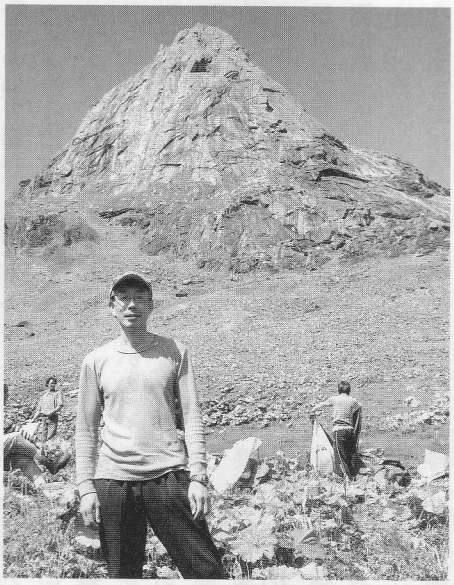
昨年夏、短い休暇を利用して中国四川省、四姑娘（スークーニャン）山の近くにある牛心山（4、942㍍）北東壁に新ルートを拓くことに成功した。今後、この魅力ある未開拓の地に興味を持ち、足を運んでもらえる人がいればとの願いを込めて山行記録（8月7日～17日）を報告したい。

この山群については、四姑娘山は有名なものの、周囲の山はほとんど知られておらず、文献も中村保氏の「ヒマラヤの東」くらいしか見当たらない。4年前、私の所属する東京YCCを通じて、この地域に足繁く通われている大内尚樹さんと知り合う機会があり、以降、会のメンバーが2度、この地域に出向いている。私は話を聞くばかりで、なかなか休みが取れず、参加できないなか、08年は四川大地震でアプローチもできない事態になり、昨年になり、やっと山行が実現した。現地はまだ災害復旧が終わっておらず、アプローチの道路状況も不確かということで、短期間で登れる未踏峰がよいというこ

とになり、大内さんを含め総勢8名の混成パーティーで牛心山にルートを拓くことになった。

先発隊3名は7月16日に現地入りし、雨天続きの合間を縫って、牛心山と同じ双橋溝という谷沿いにある5、086メートル峰の初登頂に成功した。その後、他のメンバーも各自の休みに合わせてそれぞれBCに集合することになり、私は8月7日に他の2名と成田発北京経由で成都入りした。そこからは以前から世話になっている現地エージェントのガイドがBCまで引率してくれた。このエージェントには四川登山協会副理事の李慶さんら日本語を話せるガイドがおり、しかも現地で登山許可を出してもらえるので非常にありがたい。おまけに今回は登攀具以外はすべて現地調達、BCまでの荷上げと食事付きという大名旅行だった。

8月8日、4WDに乗り、地震の震源地だった汶川を避け、成都の西の雅安から山道に入る。こちらもまだ復旧工事中で、泥だらけの道はいつ通行止めになってもおかしくない状況だった。途中、工事による時間待ちもあり、夜やっと双橋溝入り口の渡暇村の民宿へ。翌9日、半日のキャラバンでBC入り。10日には8名全員が集合した。一気に4、000メートルを超える高度になるため、高山病でダウンする者もいた。私は、直前に日本で10回ほど低酸素室に通い、富士山でも4回にわたって順応訓練をしたせいか、ほとんど影響を受けずに済んだ。BCはなだらかなカール状の中の行者ニンニクの群生のそばにあり、麓から放牧のヤクが上がってくる、のんびりした所。周りには他の登山者もいない。


BCにて筆者

雨天続きだった空は9日から回復に向かい、登攀は4ピッチのルート工作のあと、10日にかけて計10ピッチのフリー主体（最高グレード5・10b）のルートを完成させた。各ルートの終了点は下降用支点にもなるので、すべてボルトを使用。中間支点はカム類が使えたため、ハーケン、ボルトは10本程度に留めた。岩壁に雪はついておらず、快適な花崗岩のクライミングが楽しめる。7名の大パーティーとあって、セカンド以下はすべてユマールを使った。ザイル6本の操作とスピーディーな登攀が重要な要素になった。

壁の終了後はもろい岩稜が頂上まで続く。おまけにみぞれが降り出し、ビバークは寒そうなので、初登頂は諦め、同じルートを懸垂下降した。取り付きに着いたころ、ちょうど日が沈んだ。BCに帰り、夕食に合わせて完登の祝いをしたが、みんな疲労困憊で酒も進まず、早々のお開きとなった。

登攀が早く終わったので、残りの日は周囲の谷へ偵察に出かける。女王峰、兎、野人峰、ポタラ峰など名前のついている山はさすがに見栄えが良いが、それ以外にも無名の未踏峰がいっぱい隠れている。谷も高山植物やきのこの宝庫で、それだけで

8ピッチ目の登攀

も十分見ごたえがある。ただ、麓の観光ポイントに行っても、日本からこれだけ近いのに、観光客は欧米人がほとんどなのは意外だ。同じ四川省にある世界遺産の九寨溝は多くの日本人が行くらしいが。

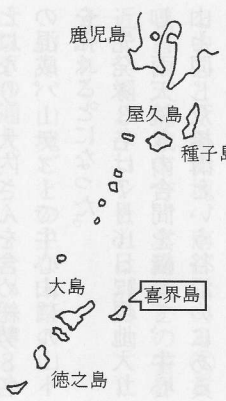
帰りは、近道になる汶川経由の道が通れることがわかり、震源地近くを通って都江堰から成都に戻る。残念ながら天気が悪く、四姑娘山は最後まで見ることができなかった。道路脇のがけ崩れや倒壊した建物など震災の傷跡はまだ消えておらず、そのすさまじさに驚愕してしまった。そんな場所を観光の我々が通るのは気がひけるが、地元からすれば、観光客が少しでも多く来た方が経済の回復にもつながるとのことのようだ。

私自身、今回初めてこの山域に足を踏み入れたが、瞬く間にその魅力に引き込まれてしまった。日本から2日ほどで、こんな秘境に気軽に来られることを知り、今後の山行を計画するのがますます楽しみになってきた。日本からは90年代に広島隊が四姑娘山に、05年には山野井泰史氏がポタラ峰に登っている。OUMCからも、ぜひ、チャレンジャーが出ることを望む。

（1984年人間科学部卒）

喜界島だより

田村　俊秀



ユタ神様

ナーミ　キカイ　ウモーユ　とユタ神様は言った。

ユタとは喜界島を含む奄美諸島の民間霊媒師である。喜界はあまりに遠く、独り暮らしは淋しく、さりとて島の不思議な魅力に未練もあり、迷っていると、カミサマに相談（占う？）するよう勧められた。占いの作法通り、焼酎と米、塩に金一封を携え、カミサマに伺った。カミさまは一見ただの平凡な中年の農婦で、チャブ台を挟んで、お茶を勧められながら世間話と思いきや、いつのまにか私の生まれ育ち、身上が旧知の知人のようにあたりまえに話し込まれているのに気付いた。あんたは喜界に帰って来るよ、と冒頭の島言葉でのたまった。かくして島に居ついて4年になろうとする。

太平洋　ガジュマル　美人

喜界島は、奄美大島から沖縄、石垣島に至る大小さまざまの南西諸島の1つ。奄美大島の東方海上に浮かぶ、周囲40キロたらず、人口8千少々、隆起珊瑚礁の可憐な小島である。治承元年（1177年）、僧俊寛が謀反のかどで平清盛により流されたのがこの島で、俊寛の墓がある。典型的な僻地離島で、かつて「民俗学の宝庫」と言われた独特の生活様式、言葉、伝統に混じって、失われつつある日本古来の奥床しいマナーが息付いている。砂糖黍畑ばかりの平凡な島であるが、四面大洋に囲まれ、見渡す限りの長大な水平線に日月が昇り沈む光景は実に壮大である。亜熱帯ながら夏でも爽やかな海風、ガジュマルの林に花が咲き乱れ、アサギマダラ蝶が舞い、エメラルド色の海には夜光貝が群れ、人々は心優しく、住心地は申し分ない。島人（シマンチュー）は顔の彫り深く、黒い瞳に長い睫毛。女性は皆美人に見える。

島の楽しみ

休みは日曜だけ。週6日勤務の疲れでひたすら寝る。とはいえ緊急患者からの呼び出しがしばしばある。時々、看護師達とスキューバダイビングに行く。実は私のダイビング歴は20年。南洋諸島から南半球の海を渡り歩いてきた。島の海は世界に劣らない見事な珊瑚礁と熱帯魚の宝庫。どうか観光化されないでほしい。釣りも盛んというより、竿を入れるや食らいつく入れ食い状態。

商店街、食堂・喫茶店の類は少なく（八百屋さえ無い）、金の使い道が無い。島の特産は黒砂糖と黒糖焼酎。そのせいか、誰もかもえらく飲兵衛で、飲み屋だけはやたらに多い。飲み会となると、さんざん飲んだ後はカラオケで朝方まで歌いまくり、翌朝、涼しい顔で出勤する。とても付き合い切れない。子供時代から蛇皮線と島唄で鍛えたせいか、島人は声が良く、歌は玄人はだし。たった一軒のライブハウスでは素人のグループサウンズが毎晩のようにジャズやロックで歌い騒いでいる。8月は集落ごとの趣向で浜辺でカチャーシー（8月踊り）。輪になって独特の手振りで優雅に踊る。手振りごとに深い意味があり、複雑極まる。次いでエイサー踊り。小太鼓を叩き、激しく踊り跳ねまくる。

砂糖黍とゴマと絣

主産業の砂糖黍のほかゴマの栽培が盛んで、日本全国の大部分のシェアを握る。かつては島の女はすべからく紬を織り、大島紬の名を馳せた

が、近年は安い韓国製に押され、滅びかけている。仕事を求めて島の高校生の90％が内地に就職する。大阪を目指す、あるいは大阪生活の長い者も多く、関西弁で会話が出来るくらいだ。とはいえ島人の望郷の念は強く、島で余生を送るのが終生の望みという。

なぜ喜界？

定年の翌日から場末の病院で臨床医の復習を始めた。とはいえ40数年のブランクは大きく、大学でボンヤリしている間に現場の医学の進歩はすさまじく、零から勉強の仕直し。半分の歳の若造指導医にコテンパンにしごかれ、NPOのパキスタン医療援助参加を口実に逃げ出した。パキスタン北部は事実上アフガンで、タリバン相手の内戦現場でスリリングな日々を堪能？して逃げ帰ったものの、生来の放浪癖のせいか、喜界島に転げ込んだ。なぜ喜界島？　私の履歴は理由の無い行き当たりバッタリの集積だから。あえて訳と言えば、この島には沖縄には珍しく、ハブが全くいないことか。

琉球王国

島では誰もがNHKアナウサーのような見事な標準語を話すが、島人同士では沖縄弁になり、チンプンカンプンさっぱりわからない。相手によって島言葉と標準語つまり日本語を器用に使い分けるバイリンガーである。喜界はかつては沖縄の琉球王国に属した。明治の「琉球処分」で日本国に併合されたが、本来、日本本土とは別の独立文化圏である。日本化されたとはいえ人種もネイティブで、混血が進んでも内地人と微妙に異なり、エキゾチックな風貌である。

病院

喜界徳洲会病院は約100床、島唯一の総合病院で、僻地にも拘らずCT、MRIを始め最新医療機器を揃え、内地から専門医が巡回するので、僻地のハンディは感じないが、島に根付いた専任の医師、看護師不足のためフル活動出来ないもどかしさがある。小さい島に32の集落があり、それぞれ独自の訛り、習慣を持ち、話す言葉で出身集落が当てられる。そのくせ島中の人々は代々、知人や婚姻関係で誰もが網のように繋がっており、病院といえども患者と職員は互いに知人、親戚で、各集落の寄り合い場である。

病院のスタッフと。右端が筆者

だから医師、看護師も知人のごとく振舞わねばならない。というより島人の懐に入らないと診療が妙に他人行儀になる。内地人の私は最初、島人の好奇にさらされ、プライバシーは無いに等しかった。不倫浮気はもってのほかで、窮屈この上ない。つまりは島に住みつく医師かどうかの品定めである。私を島に縛るべく現地妻を紹介してくれたが、相手は30歳年下（つまり44歳）の情熱的美人で子連れバツイチ。まもなく公私ともお役御免も近いので、ご辞退申し上げた。

島の朝は早い。7時の回診に始まり、外来病棟診療に次いで島中の訪問診療に出かける。訪問診療は家庭に入り込むので興味深い一方、甚だシンドイ。高齢者や生活保護世帯が多いので、診療だけで済まず、医師は生活支援、福祉活動にまで関わらなければならない。地域医療は大学の業績競争や派閥争いとは無縁の泥臭い仕事で、大学を訪ねて綺麗事を聞かされると違和感を感じる。島のみならず医学と社会復帰、福祉生活支援が密接に関連するのは時代の流れである。

お山よ　さよなら

先の連休に、元の職場仲間と北アルプス燕岳に登った。久しぶりのピッケルとアイゼンに戸惑った。天候は快晴で、白銀の槍穂高、剱まで一望出来た。50年昔、さんざん歩き回った峰々に再会して涙の出る思いであった。間もなく後期高齢者、もう会うことは無いだろう。お山よ　さよなら。

（1963年医学部卒）

会員の近況

（白馬集会や新年会の出欠はがきから抜粋。その後の変動などは未確認。卒業年次順＝西暦。敬称略）

二木　節夫（工54）医者から脊柱管狭窄症と変形性膝関節症と言われ、山登りには不向きな体になりました。このため、金華山の麓を横に歩く森林浴を楽しむ程度です。ゴルフはカートで回るので、まあまあ可能です。妻の具合も一進一退で、依然として二人三脚の生活です。今年で80歳になります。平均寿命を若干上回りま

したので、これもまあまあです。

三枝　礼子（薬55）ネパール往復の航空便がすっかり不便になってしまいました。カトマンズ盆地の大気汚染進行、物価上昇の波と停電、政情不安定、ヒマラヤにも温暖化等々、気がかりの種ばかりです。「いつかそのうち、カトマンズでゆっくり昼寝、気ままにトレッキングを――」なんて、もう断念です。

横井　保枝（文56）登山、スキー仲間が年々、減っていくのが淋しいです。今年もできるだけ滑り歩きたいと思っています。

宍戸　元（医57）相変わらず現役で診療しています。しかし、仕事一筋は適当にしてカメラにも頑張っています。ただ、学生時代と違い、山の写真は駄目です。

辻川　真（経57）夫婦そろって70歳の大台乗り。しかし、体躯は健全そのもの。坂道を登るのは難あれども、スキーでの滑降はいささかも支障なく、快適そのもの。よって正月夫婦スキーは北海道ルスツの中上級コース2～3キロをノンストップでキャーキャーと幼児の如く粉雪を蹴って下る。だが、これもあと2、3年のことになるやも知れずの思いしきりで、愛惜の情大。ぼつぼつゴルフ派に転向？

白井　達郎（工62）本年で70歳となりました。足腰も弱体化して散歩程度がせいぜいです。皆様のご健勝をお祈りします。

梶本　孝治（工63）数年前までは冬の寒波が来ると、裏六甲の凍った滝を楽しんでいたのですが、今冬は冬眠。「ヤキがまわったなあ……」と痛感しています。昨年、旧梅の木寮建設でボッカ合宿した世代で「梅の木会」と称する会を発足させ、2年に一度、六甲山麓に集まって、梅の木寮で飲んでダベった日々を再現させようとしています。少し上の先輩も、若い後輩も、梅の木寮でストーブを囲んだ方は入会資格あり。次回は来年ですが、「オレも」という方はご案内します。

原　治左ヱ門（理67）横浜から大阪へ居を移してから初めての正月を迎えました。本年も宜しくお願い致します。

黒田　治朗（医69）昨年9月で40年来の常勤を終え、パートの勤務に入りました。木曜はフリーで、余暇に充分時間を割くつもりです。ゴルフ等お誘い下さい。

畑中　薫（医69）毎日、3つの電車と1つのバスを乗り継いで三田の西にある有馬高原病院へ通っています。精神科を担当して3年目に入りました。週4日の日勤と月1回の宿直があります。休みの日は自分の持病であるC型肝炎の受診のため患者として別の病院へ通っています。

上松　一雄（工75）タスマニア島のクレイドル・マウンテン国立公園が気に入って、3年前、昨年と家内と散策に出かけました。ハードな山登りは難しいながら、動物、自然と接する機会を大事にしている今日この頃です。

榊原　淳（工83）25年ほど封印していた山を5年前に再開しました。まずは減量のためランニングを始め、やがて、それが趣味となってマラソン大会に20回以上出ています。富士登山競争も、ハセツネカップ（日本山岳耐久レース「長谷川恒夫CUP」）も完走しました。山は、人気のあるクラシックルート中心に岩、雪、氷を楽しんでいます。この大不況で仕事はきつくて辛いのですが、山やランニングで心のバランスが保てています。そんなことを数年前からブログ「山とランニングの日記」(http://pub.ne.jp/asakaki/)に書き綴っています。山から遠ざかっている方もちょっと走ればすぐに登れるようになりますよ、長く楽しみたいです。夢は還暦までに8、000メートル峰を登ること。

奥山　宏臣（医84）昨年12月1日付で兵庫医科大学小児外科教授を拝命しました。といっても医局員は私も含めて3名ですので、勤務は今までと変わりなく、当直あり、on call（待機）あり、です。昨年、雪山の道具を一新しましたので、今年は5月に北アルプスへ行こうと計画中です。

河野　美樹（医05）昨年、日本登山医学会の会員になりました。本年から山岳認定医制度が始動するとのことで興味をもっています。実技・実習などもあるようで、これを機会に山岳活動も少しとりいれていきたいと思っています。7月からまた大阪勤務となりますので、近隣の方はよろしくお願いします。

渡辺　景子（基礎工05）卒業してから弁理士資格取得の勉強をしています。合格する自信はまだありませんが、勉強は楽しいので、いつか役に立てばいいと思っています。

編集後記

現役山岳部の休部は寂しい限りで、存続策が実を結ぶよう祈らずにおれません。半面、元気印のOBは相変わらず中国・チベット方面を走り回っています。田村氏の「喜界島だより」は心のこもった報告で、島への愛着が滲み出ています。原稿は何でも歓迎。今号から現役活動報告が休載になったこともあり、若い方の寄稿を特に歓迎します。

（会報担当・高田邦雄）